

平成20年度産業廃棄物

実態調査結果

1

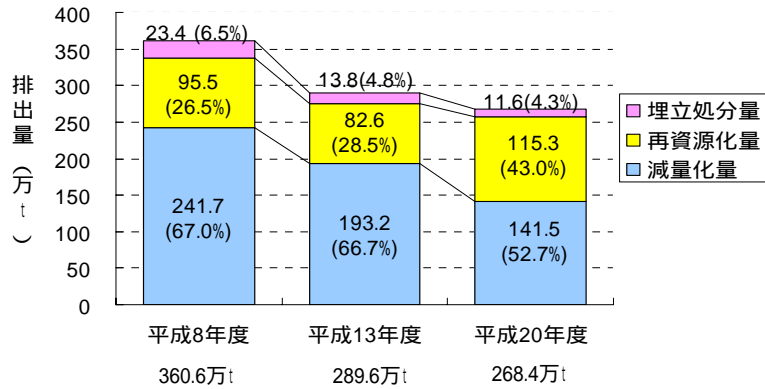
現行計画の達成状況について（6つの数値目標）

| 目標項目 | 平成13年度値 (基準値) | 平成22年度 (目標値) | 平成20年度値 |
|--------------------|------------------|-------------------|-------------------|
| 排出抑制率 | 289.6万t | 5%削減 (274.4万t) | 7%削減 (268.4万t) |
| 再生利用率 | 28% | 4ポイント増 (32%) | 15ポイント増 (43%) |
| 埋立処分量 | 13.8万t | 50%削減 (6.8万t) | 16%削減 (11.6万t) |
| 市域内処理率 | 52% | 4ポイント増 (56%) | 増減なし 52% |
| ISO14001 取得事業所数 | 80件 | 250件 | 210件(22年7月末) |
| KES取得事業所数 | - | 850件 | 881件(21年3月末) |

2

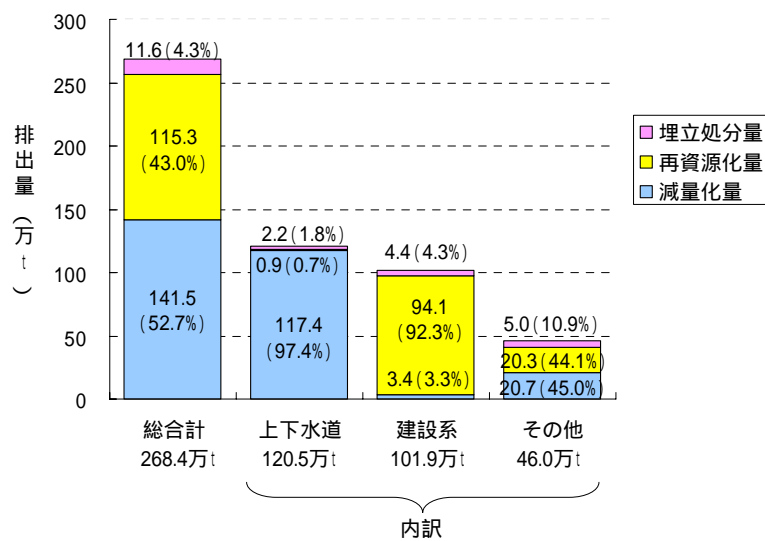
京都市の産業廃棄物量の推移

- ・ 排出量が減少(減少幅は逡減)
- ・ リサイクルの増加
- ・ 埋立処分量の減少



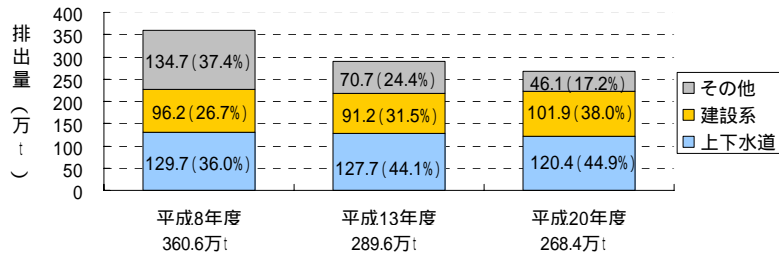
3

排出量と業種別内訳(平成20年度)

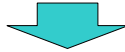


4

業種別排出量の推移



上下水道 大半が上下水汚泥
 建設系 大半が建物の解体から
 排出抑制は困難
 排出抑制は困難

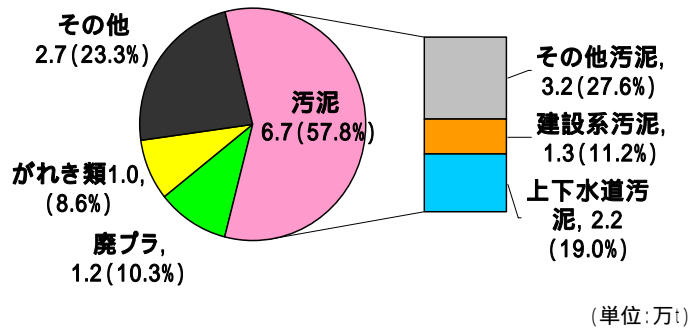


「その他」については、排出抑制が進んでいる(平成8年度比1/3を達成)が、更なる排出抑制のための取り組みが必要である。

5

埋立処分量における廃棄物の種類

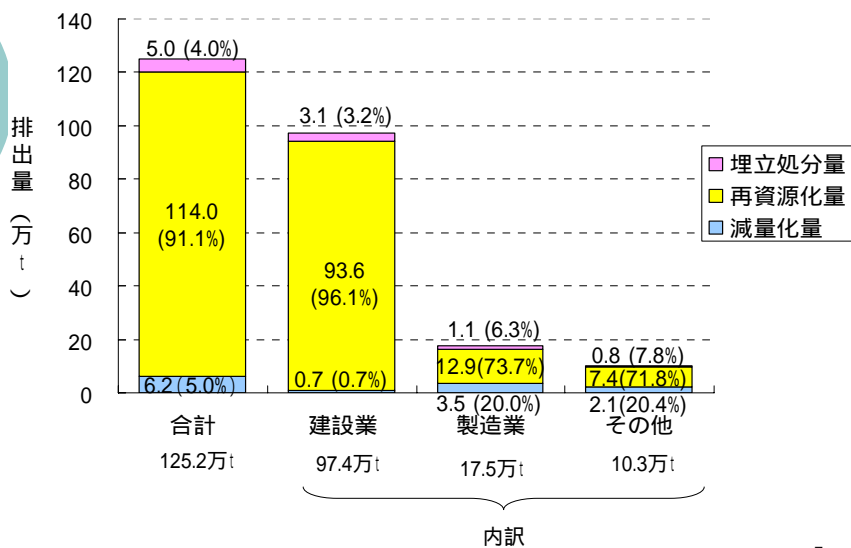
平成20年度埋立処分量(11.6万t)の内訳



汚泥が埋立処分量の約6割
 上下水道汚泥及び建設汚泥の排出抑制は困難
 汚泥の再資源化が重要

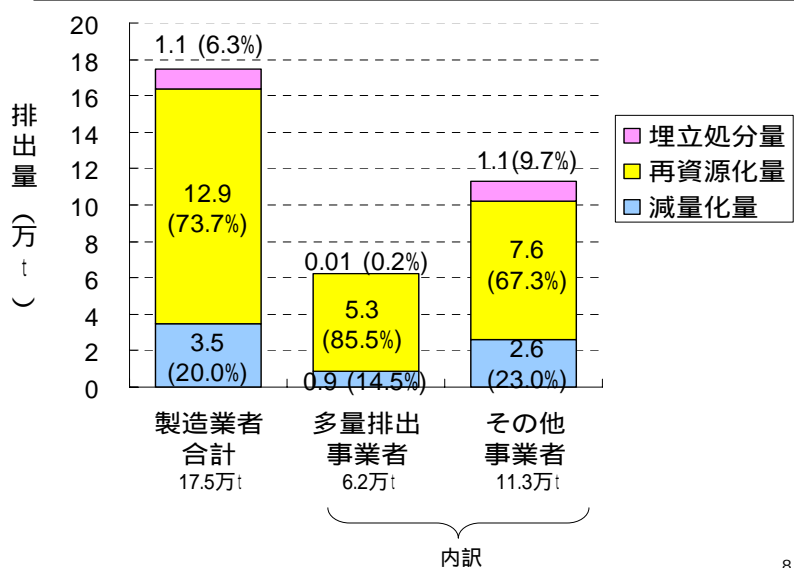
6

汚泥を除いた場合の処理内訳



7

製造業者の処理内訳



8

現状と課題(再資源化)

< 汚泥以外 >

建設廃棄物の再資源化率は、既に96.1%に達している。

製造業を見ると、廃棄物の再資源化率は、多量排出事業者(85.5%)に比べそれ以外の事業者(67.3%)が低い。

多量排出事業者以外の事業者の再資源化率向上が重要

< 汚泥 >

埋立処分量の観点からも再資源化が重要

9

許可業者設置の産業廃棄物処理施設の変遷

焼却炉や埋立処分場などが減り、がれき類、木くずの破碎施設などが増えている。このデータから焼却施設など環境に対する負荷の高い処理の需要が減り、リサイクル処理の需要が増えていることが推察される。

| 施設の種類 | 平成11年度 | | 平成16年度 | | 平成21年度 | |
|---------------------|--------|----------------------|--------|----------------------|--------|--------------|
| | 施設数 | 合計処理能力 | 施設数 | 合計処理能力 | 施設数 | 合計処理能力 |
| 焼却 | 14 | 48,990t/年 | 12 | 48,000t/年 | 2 | 34,800t/年 |
| がれき類破碎 | 11 | 2,034,000t/年 | 8 | 2,208,000t/年 | 14 | 2,590,800t/年 |
| 木くずの破碎 | 0 | | 8 | 40,500t/年 | 8 | 138,600t/年 |
| その他(廃プラスチック等)の破碎・選別 | 11 | 106,350t/年 | 19 | 172,800t/年 | 27 | 185,700t/年 |
| 廃酸・廃アルカリの中和 | 1 | 4,800t/年 | 1 | 4,800t/年 | 0 | |
| 廃油の分級再生 | 1 | 2,700t/年 | 1 | 2,700t/年 | 1 | 2,700t/年 |
| 汚泥の脱水・固化 | 0 | | 1 | 75,300t/年 | 3 | 716,100t/年 |
| 堆肥化 | 1 | 5,700t/年 | 1 | 5,700t/年 | 1 | 5,700t/年 |
| 安定型最終処分場 | 1 | 53,277m ³ | 1 | 53,214m ³ | 0 | |

1 各施設の年間処理能力は許可証記載の1日当たりの処理能力に300を乗じた量とした。

ただし、安定型最終処分場については、埋立容量であり、年間処理量ではない。

2 処理能力については、1つの施設で2種類以上の処理を行っている場合、主な処理方法と考えられるものに計上した。

10

市域内処理の状況

燃え殻、ばいじん、鉍さい、廃酸、廃アルカリ、廃油等の市内に処理施設の少ないもの又は処理施設がないものは、流出率が高い。

処理料金、発生現場から処理施設までの距離等の経済性、運搬効率等も考慮されるため市域内で処理能力が充足した場合であっても、市域内処理率が向上するとは限らない。

11

平成20年実態調査から導き出された課題等の総括

排出抑制率(目標値5%削減 H20実績値7%削減)

上下水道、建設系廃棄物の排出抑制は困難であるため、引き続き、それ以外の廃棄物の排出抑制が必要

埋立処分量(目標値6.8万t H20実績値11.6万t)

埋立処分量の減少のためには、埋立処分量の約6割を占める、汚泥の再資源化が重要

再資源化率(目標値32%以上 H20実績値43%)

多量排出事業者の再資源化率は既に高いため、中小事業者等の再資源化率の向上が必要

市域内処理率(目標値56%以上 H20実績値52%)

経済性、運搬効率も考慮されるため、市域内で処理施設が充足した場合であっても、市域内処理率が向上するとは限らない。

12